

いじ悪く時々列を乱して困らせたりしたこともあった。抑留中唯一回だけ労働賃金として十ルーブル貰ったことがある。何に使ったか覚えていないが一部持ち帰って記念にとつてある。

日常の収容所内の生活はラーダーと大体同じであり、一番困った便所もまた別棟に離れて築かれた掘っ立て小屋で吹き流し、寒冷は身にしみるものであった。

かくて昭和二十二年十月、A収容所に移り、同月末帰国の為エラプカを去る。

## 凍土に眠る戦友を悼む

滋賀県 陌間 政 雄

聞き手 本日は、お忙しいところお邪魔しまして恐縮に存じます。早速でございますが、まず入ソまでのことについて話していただき、抑留中体験され、帰国されるまで、お話し願いたいと思います。

陌間 陌間です。私は昭和十八年一月学校卒業後、

満州車両(株)へ入社しました。昭和十九年十一月徴兵検査を受け、昭和二十年五月二十日公主嶺機動第一連隊(七五〇部隊)第二五二二部隊へ入営、昭和二十年七月二十九日、南東満国境線配備、敦化を経て鏡泊湖山岳陣営についておりました。

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を陣営で聞いた。昭和二十年八月二十六日、吉林機動兵舎第二連隊で武装解除を受けた。

八月二十五日、ソ連軍指揮により、敦化飛行場へ集結、千名単位の編成で集団を結成させられた。八月二十六日、関東軍からの略奪物資(兵器、医療用器具、薬剤、食糧、被服等)の貨車積み込み作業に二十日間程従事させられた。

昭和二十年九月十六日、敦化駅で乗車、ダモイだと言われて出発、九月十八日ハルビン駅で貨物車に乗り換え、九月二十日入ソ、この間の食事はカンメンパンで過ごした。十月三日、アルタイ地方ロストフカ第一収容所へ入所、約千名単位であった。

入所以来約一か月間、大根の千切り干しが常食であ

りました。そのため隊員の半数は栄養失調となり、収容後四か月間に約三百六十名が亡くなられた。作業は建築作業が主でありました。私も栄養失調でフラフラの状態で、毎日作業に出されておりましたが、とても作業に出られる状態ではなかったので、所内でブラブラしておりました。

収容所には医務室があり、治療を受ける数が多くなり、毎日四、五名ずつ亡くなっていました。二十一年二月末までこの状況が続いていた。

当時の食事は朝、夕食は燕麦、コーリヤンのスープ、昼食は黒パン約二百グラム一切支給され、腹の足しには程遠かった。ブラブラしていたとき、収容所の軍医、渡辺氏と知り合い、その厚意で治療を受け、体調もよくなりつつありましたので、亡くなった戦友の遺体を埋葬する穴掘り作業に従事できるようになりました。遺体は裸のまま保管されていて、心に痛みを感じつつ、涙を流し埋葬に従事していた。

その後一か月程収容所の作業の割り出しの手伝いをしておりました。ソ連の収容所長より、一般作業に出

よと言われ、農業機械の製造工場で働くこととなりました。寒さは零下三十度くらいまで下がり、凍傷にかかる人が多くなりましたが、幸い私はかからなくて助かりました。

二十一年三月頃より死亡する人も少なくなったようでした。春五月頃になると草の若芽が出るようになり、摘んで飯盒で煮、岩塩で味をつけ食べ、空腹を満たした。

二十一年十二月中旬、沿海州の伐採作業場へ連れて行かれた。

冬は松の実、夏は茸をとり、空腹の足しにしていた。食事は朝はスープ、昼はパン三百五十グラム、夕食はパン少量とスープ、よく蛇を食べた。

二十二年十一月末ナホトカへ集結、ダモイだと聞いて喜んでおりましたが、船が凍結のため入港できず、ガッカリした次第です。

二十三年六月まで伐採作業に従事し、二十三年六月下旬ナホトカへ集結した。その間、伐採中に同胞一人が茸をとりに行き行方不明となり、山中を限なく捜索

したが見つからずじまいでした。多分狼に襲われたらしいとのことであった。ナホトカへ到着後、民主教育を受け、七月舞鶴へ上陸できた。

私は体が頑丈な方ではなかったが、復員後三十余年間、元気に過ごすことができました。

現地で亡くなられた戦友たちに、心より哀悼の念を捧げ、終わることとします。

## 終戦・満州・シベリア入国の

### 思い出

千葉県 城市 義雄

昭和二十年八月十五日、忘れる事も出来ない終戦、その翌日私は公主嶺から奉天行きを命ぜられ、山口県出身の井隅某と二人で貨車に乗り込む。その貨車は南下中の日本軍臨時列車だったと思う。途中各駅に停車、中国人の顔が我々日本人に対する憎しみの目が光って見える中、列車は奉天へ向け進行、文官屯駅に到着し

た。奉天は既に、ソ連軍が制圧、列車はもう進む事は出来ないとの連絡で、止むを得ず文官屯駅下車。南滿造兵廠へ行き阿部少佐（同郷出身）と会い、事情を説明し、取敢えず造兵廠の庶務課に事務員として働くことにした。そして原隊との連絡は完全に取れなくなった。同じ庶務課の山本さん宅へお世話になり、毎日山本さんの古着で変装し、それを着用して一緒に務めるようになった、山本さんの家族は、奥さんとお嬢さん一人、三人暮らし。私を加えて四人暮らしとなった。官舎の附近も事件が毎日発生する。ソ連軍が駐在し、殺人、強盗、強姦が横行するようになった。造兵廠に行けば日本軍人はソ連軍に依り武装解除、そして何処かへ連れて行かれる、毎日列車で運ばれている等、ニュースも聞く。私自身の回りに危険が迫った事を感じ、偽名を決意（島根県出身）増田健治と命名、軍属として満州に来た。（勿論軍籍はない事にした）そして抑留から帰国迄全て偽名で押し通した。連日のようにソ連軍の暴行の中恐怖におびえていたが、山本さん一家と自由を味わい乍ら楽しい日々を過